

## 報告 4

### 複言語・複文化活動のための越前町フィールドミュージアムの可能性

南 博史（京都外国語大学）

#### 1. はじめにー本報告の背景ー

京都外国語大学の学生が農業に取り組む背景には、大学の建学の精神「言語を通して世界の平和を」がある。農業体験をとおして、私たちをとりまくローカルからグローバルなさまざまな問題を学び、解決に取り組んでいく。「一粒のお米から世界が見える」は、活動に参加する学生に伝え続けているモットーであり、建学の精神とあわせた広く社会に発信するメッセージである。

本報告では、活動のフィールドとなっている越前町フィールドミュージアム活動の 10 年を越える活動の概略を 1 章、2 章であらためて説明した上で、3 章では新型コロナウイルス感染拡大期におけるフィールドワークの成果をまとめる。4 章、5 章では、共同研究を実施した今年度までの 4 年間の中で、研究テーマである複言語・複文化活動としてのフィールドワークが可能かどうかをまとめて報告する。

#### 1.1 建学の精神「言語を通して世界の平和を」にもとづく実践活動

京都外国語大学では、長年にわたって「言語と平和」をテーマにおもに初年次生を対象とした教育プログラムをおこなっている。とくに、「言語と平和Ⅱ」という講義では、平和を阻害する問題を発見し、その解決に向けてゼミ形式で研究する。こうして得た意識、知識を学生が学外の実際の社会で実践することができれば、建学の理念を具体的に各人に落とし込んでいける。また、卒業後のキャリアにも繋がるだろう。

また、本研究では、社会課題の解決に努め、異文化を理解し、多様性を認め、包摂的な社会を作っていくためには、地域住民と一体となった実践的な地域活動を継続的に行うことが重要であることを、フィールドワークにもとづく複言語・複文化活動をとおして明らかにする。さらにはこれらの活動を通じて、活動参加者にも複言語・複文化主義を根付かせることを実践的研究プログラムのテーマとした。

#### 1.2 越前町フィールドミュージアムにおける実践的研究プログラム概要

今回の実践的研究プログラムは、以下のコミュニティの活動が含まれている。

国際文化資料館および学芸員課程外部連携活動、国際貢献学部グローバル観光学科ゼミ活動、同学科 Community Engagement Program 越前町、外国語学部公共政策ゼミ活動である。

### 1.2.1 準備・派遣地域・受け入れ期間・時期

①派遣地域：福井県越前町熊谷区および西三区（熊谷、古屋、増谷の三区自治連絡協議会）

②受入れ期間：2012 年越前フィールドミュージアム活動開始以来

- ・2012 年度～2022 年度、国際文化資料館外部連携活動。通年、1 回/月程度。
- ・2012 年度～現在、学芸員課程外部連携活動。1 回/月程度。
- ・2013 年度～現在、公共政策ゼミ、国際文化資料館、学芸課程外部連携活動に参加、夏期ゼミ合宿。
- ・2020 年度～現在、グローバル観光学科ゼミ、国際文化資料館、学芸課程外部連携活動に参加、夏期ゼミ合宿。
- ・2019 年～2021 年度、Community Engagement Program（以下、CEP）越前町。6 月(田植えなど)および夏休み期間 9 月（稲刈りなど）に事前活動、秋学期期間は、1 回/月程度。



図 1 越前町熊谷位置図

### 1.2.2 プログラムタイプ

- ①（資格課程）博物館実習ほか資格課程科目
- ②（GT 学科正課）地域調査・課題解決型プロジェクト（必修科目 6 単位）
- ③（自主参加）国際文化資料館外部連携・研究活動、フィールドミュージアム活動を通じた地域課題解決プロジェクト

### 1.2.3 目標と方法

- ①（目標）「一粒のお米から世界が見える」をモットーにして、中山間地の課題（農業の衰退、少子化、過疎など）から、フードロス、食糧自給率、二酸化炭素排出による環境問題など、身近な問題からグローバルな問題の課題解決に向けて、大学で学ぶ学問知と実践活動から得られる経験を活かして、大学の建学理念である「言語を通して世界の平和を」目指すとともに、自らの人生をより豊かにすることを目標とする。
- ②（方法）古民家や地区集会所にて集団生活をし、地域の身近な活動に参加しながら、地域連携先の若手農業士や地区住民、福井県・越前町役場担当者、地域おこし交流隊員、

さらに若者が中心となっている移住促進チームなどとの交流を通して、現地の課題への理解を深め、調査をふまえた課題解決策を提示、実践する。

#### 1.2.4 対象学生の人数や特色

国際文化資料館および学芸員課程学生についてはカウントしていない。現在もライングループに参加する OB などを含めると 100 名前後になるものと思われる。特徴としては、外国語学部各学科の 1~4 年生が参加していること、2019 年以降は国際貢献学部グローバルスタディ、グローバル観光学科学生が加わっている。また、留学生（他の大学や大学院から参加した留学生含め）も 10 名ほど参加しており、出自の異なる多様な学生が関わっていることが特徴といえる。

正課として実施された国際貢献学部グローバル観光学科 2 年次生対象の CEP 越前については、2019 年、2020 年、2021 年の各年度 8 名ずつ計 24 名が参加した。

#### 1.2.5 かかわった教職員

- ・南博史（2012 年度～現在）：外国語学部教養教育（2017 年度まで）  
グローバル観光学科（2018 年度から）教員  
国際文化資料館館長（2022 年 3 月末まで）
- ・島村典子（2019 年度）：中国語学科教員：
- ・原多賀子（2012 年度～現在）：博物館学芸員課程担当教員（非常勤講師）
- ・久木淳子（2012 年度～現在）：博物館学芸員課程担当教員（非常勤講師）
- ・西村由喜子（2015 年～現在）：国際文化資料館学芸員（2022 年度まで）  
博物館学芸員課程担当教員（2023 年度～非常勤講師）

## 2. 越前町フィールドミュージアム<sup>1</sup>

### 2.1 越前フィールドミュージアム活動開始のきっかけ

#### 2.1.1 福井県越前焼復興プロジェクトへの参加

福井県が 2012 年に開始した越前焼復興プロジェクト<sup>2</sup>への参加を、NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所（略称：IFMA、設立：2003 年、場所：京都市、代表理事：南博史）

---

<sup>1</sup> 南は、フィールドミュージアムを以下のように定義している。「地域を自然やまちなみを背景とした博物館としてみたと、地域独自のさまざまな資源（自然、歴史、文化、産業、生活など）を活用し、人々が心豊かに暮らしやすい地域をつくる活動」が継続的に行われている地域をさす。

<sup>2</sup> 福井県によれば「産地を担う若手陶芸家の育成や、また、売れる越前焼の開発やその販売を支援するなど、越前焼産地が活性化するための様々な施策を県として越前町などと協力しながら展開」とある。具体的な内容については、山内孝紀（2014）「「手仕事文化圏」復興へー越前焼を新しい時代のモノづくりへ

が、田中保志氏から（株）田中地質代表、本社：武生）から打診されたことが、越前町フィールドミュージアムのきっかけとなった。具体的には、プロジェクトの中心施設となっている「越前陶芸村」<sup>3</sup>の再生（入場者数の増加）であり、陶芸村の活性化を通して越前焼の復興につなげたいとのことであった。

IFMA ではこれを受けて活動の方針を、越前焼だけを取りあげて活性化を目指すのではなく、地域をミュージアムとしてとらえ、地域のさまざまな資産を活用し、暮らしやすく魅力ある地域にする中で越前焼産業も活性化させていくという「フィールドミュージアム構想」を提案し活動を開始した。具体的には、代表理事の南が所属する京都外国語大学の学芸員課程の学生と共にフィールドミュージアム活動を実施した。たとえば地域の魅力を発見するため「越前陶芸村」周辺のまち歩きや見学ツアーを開始した。まち歩きの中では、様々な陶芸家を訪ねた。そして、2012 年 11 月 18 日（日）に越前陶芸村文化交流会館で行われた「津村節子 越前焼を語る会」開会式にあわせて、この取り組みをパネル展示として紹介した。

### 2.1.2 越前町フィールドミュージアム活動に向けて

この初期の活動において、現在に続く越前町蚊谷寺地区、古熊谷で有機無農薬の米作りを目指す井上高宏氏との出会いがあった。また、越前焼窯元訪問をきっかけに、蚊谷寺で作陶されている幸炎焼作家の幸炎れい子さんとも出会った。ご主人であった故ベン・コーエン氏がなぜここで窯を開かれた理由などを伺い、この地区で活動拠点探しをはじめた。とくに蚊谷寺はたけのこ産地として著名であるが、近年の高齢化によってたけのこ作りに欠かせない竹林の管理などに課題があり、地区の方々と一緒に課題解決にむけた活動ができないかと考えた。

もう 1 つは同じ会場で「おにぎりプロジェクト」を実施された越前「田んぼの天使」有機の会(2015 年から)代表の井上幸子さん（越前町八田区）との出会いである。この活動を学生がお手伝いすることで、われわれも農薬と化学肥料を使用せずに水稻栽培をおこなう有機農業の価値について知ることができた。その有機農業が自然環境を守るうえでもっとも大事にされていた地区が古熊谷で、後にわれわれのフィールドワークの中心となった。

---

と進化させる～里山固有の文化資源とともに～」、『ふくい地域経済研究』福井県立大学地域経済研究所, 19 号, pp.87-111 参照。

<sup>3</sup> 昭和 46 年（1971）開設。越前焼産地の地域開発拠点として振興し、産業としての発展を目指すために、優れた技術と行動力のある若い陶芸家の受け皿となるべく計画された。陶芸村は、都市公園 100 選に選ばれている、その広大な越前陶芸公園を中心に、越前焼を学習、体験実践できる福井県陶芸館、越前焼後継者育成の拠点である福井県工業技術センター窯業指導分所（現在は閉所されている）、越前焼直売所「越前焼の館」（越前焼工業協同組合）や陶芸村文化交流会館（越前町）、お食事処や宿泊施設が点在しており、越前焼や福井県をいろんな角度から味わうことができるとある（<https://www.tougeikan.jp/about-village.html> 参照）。近年、越前焼研究に尽力した水野九右衛門氏の旧邸宅、越前焼展示室（熊谷区）が解体移築され越前古窯博物館として公開されている。

## 2.2 熊谷区におけるフィールドミュージアム活動開始

こうして越前町フィールドミュージアム活動は、蚊谷寺で毎年 4 月 29 日に開催される「たけのこ祭り」に学生と一緒に参加し、活動をお手伝いすることから具体的な活動を開始した。平行して地区内での活動時に一定期間の滞在が可能な拠点探しをはじめたが、なかなか良い物件に出会えなかった。

一方、井上幸子さんのご子息である井上高宏さん（現在、(株)田んぼの天使代表）が古熊谷で有機無農薬の米作りを始められることになった。初期の私たちの活動のカウンターパートであった福井新聞の記者の山内孝紀さんが、当時やはり越前焼復興プロジェクトに端を発する地域活性化活動をはじめられていて、彼の紹介により、古熊谷の水田で米作りを行ってきた熊谷区を訪問した(写真1)。

武生や鯖江といった中心地は丹生山地東側の日野川（九頭竜川支流）沿いにあり、それに対し熊谷区は、丹生山地東麓の一番谷奥にあって、戸数 15 戸、人口 50 人程度の高齢化が進む過疎の地区である。高齢化によって耕作が難しくなった古熊谷の水田の耕作を外部の方に委託、今回はその方から引きつぐということで、若手農業士としての井上高宏さんが新たな担い手になったのである。

しかし、この古熊谷で有機無農薬の稲作を行うことには多くの課題あること、さらに、高齢化によって人口が減少していることから、この双方の課題解決を目指す活動を行うことを考えた。また、熊谷区（京都市中京区とほぼ同じ面積）には越前焼の古窯（中世初期～）が広がっており、六古窯としての越前焼研究に尽力した水野九右衛門の旧宅もある。つまり、この地域が越前焼の歴史を明らかにする上で大変重要なエリアであった。

これに加えて、熊谷区が丹生山地を越えて越前海岸に接しており、その 1 つの城山の頂には中世山城の厨城があって、海の道であった北前船航路ともつながるなど、フィールドミュージアムとして多様な資産をもっている。たとえば熊谷周辺で作られた越前焼も山を越えて越前海岸へ運ばれ、北前船で各地に運ばれていた<sup>4</sup>。



写真1 熊谷集落空撮写真（熊谷区提供）



写真2 古熊谷棚田

<sup>4</sup> 田中照久（2010）「玄達瀬海底から引き揚げられた越前焼」、『金大考古』，67号，pp.4-9.

### 2.2.1 熊谷（越前）フィールドミュージアム構想の提案

古熊谷での持続可能な有機無農薬の米作りを目指すためには、古熊谷の水田とその周辺（奥里山）環境を守ってきた熊谷住民の課題である高齢化、過疎問題の解決に取り組んでいく必要がある。そのために直接的な関係者だけではなく、行政や京都外国語大学や IFMA のような外部団体、自然環境、動植物、歴史、民俗、産業などに関わる専門家が広くフラットに協働していく体制を作ることが重要である。そこで IFMA は 2013 年に、熊谷区の住民に対して、基本構想『「熊谷あたらしい村<sup>5</sup>づくりを目指して」～越前フィールドミュージアムを支える協働ネットワーク～』による住民と一体となった活動を提案した（図 2）。

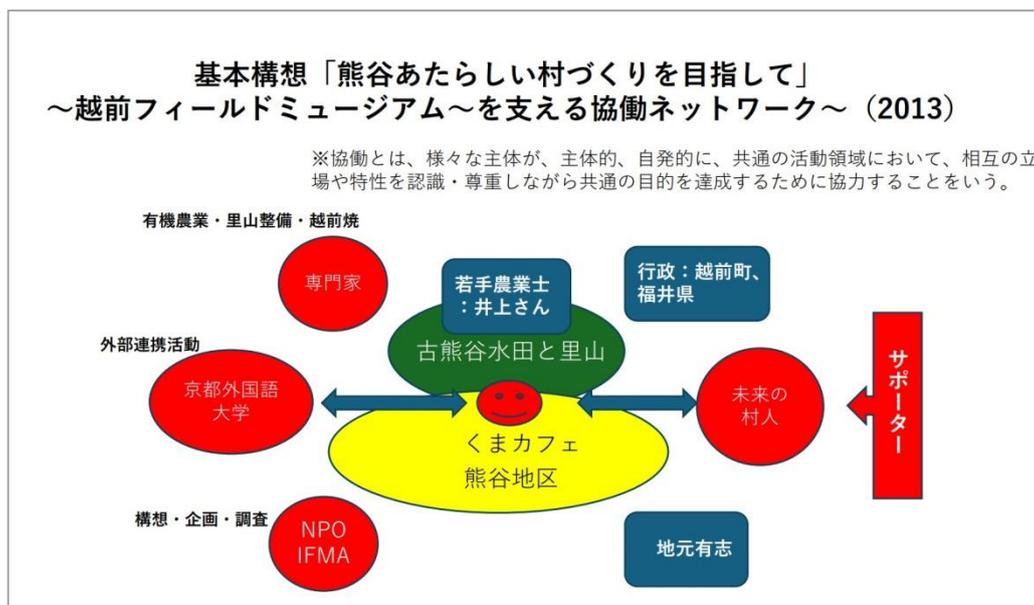


図 2 フィールドミュージアム構想図 2013 年

そして、この活動の拠点として熊谷区の空き家（水野方よし氏所有）を借り受け、地域住民交流センター「くまカフェ」として本格的な地域活動を開始した。この活動は、南の研究費、京都外国語大学国際文化資料館の外部連携活動と位置づけ、国際文化資料館の予算、農業農村の有する多面的な機能維持のための政策である「多面的機能支払交付金」、「中山間地域等直接支払交付金」によって住民の地域保全活動と一体となることができた（図 3）。

<sup>5</sup> 新しい村とは、空間的・物理的に村を作ることではなく、あくまで熊谷区をベースに住民と協働するコミュニティを指す。



図3 多面的機能模式図

農林水産省 HP「農村の有する多面的機能」より

[https://www.maff.go.jp/j/nousin/noukan/nougyo\\_kinou/](https://www.maff.go.jp/j/nousin/noukan/nougyo_kinou/)

## 2.2.2 フィールドミュージアム構想による調査項目と目標

この構想に基づき、フィールドミュージアムとしての資産の発見・再生・創造のため、以下の段階と目標を設定した。

### 1) 村づくりに向けた学術的基本調査

- ①越前焼窯跡および旧集落の考古学調査による資料収集
- ②熊谷および古熊谷に関する歴史的民俗学的調査による資料収集
- ③熊谷を中心とした伝統的生活文化の調査

### 2) 村づくりに向けた実験的実践活動

- ④棚田の整備と有機農法の実施
- ⑤休耕田・ため池などの活用、周辺の里山の再生

### 3) 村づくりに向けた発展的実践活動

- ⑥伝統的建造物の再現・移築
- ⑦（古）熊谷越前焼の製作
- ⑧新しい村による衣食住文化・年中行事の開始、新ブランドづくり

## 2.2.3 くまカフェを拠点とする地域活動

これらの調査項目と目標を見据えながら、以下の活動を開始した。

### 1) 地域住民交流センター「くまカフェ」

「くまカフェ」は、熊谷で活動しているときにオープンする。ただし、いわゆる古民家カフェではなく、あくまで熊谷区の住民など地域の方々と交流する「村を語る場」ということで、地域の方が来られたときにコーヒーなどの飲み物やお菓子を出して、いろいろ話を聞かせてもらう機会を増やしたかった。

また、ここを会場として学芸員課程の学生が、自主展を開催、演奏会などの音楽会を開いた。とくに



写真3 くまカフェ

2014 年は学芸員課程の修了展として国際文化資料館と双方を紹介する展覧会を開催している<sup>6</sup>。

さらにくまカフェでは、地域住民や外部の方々との意見交流の場にもなった。学生をいれた小グループに分かれて、ポストイット法を用いたワークショップを開催した。おもなテーマは「地域の魅力を発見」、「一番の課題は何か」などである。こうしたワークショップは住民との意思疎通をはかるきっかけとなった。

## 2) くまだん畑

くまカフェの一段上に空いている畑があったので、ここで野菜づくりをはじめた。熊谷の方々は自宅ないし集落内に多くが自家消費用の畑をもっておられる。われわれもくまカフェでの食の材料としての野菜づくりをとおして住民の方との交流もできる。こうした作物は、京都外国語大学内の学食（リブレ）で料理に使ってもらった。

## 3) あぜーロード

英国の BEATLS のアルバム「Abbey Road」ジャケットの横断歩道を渡るグループの姿をヒントに、水田の畔（あぜ）を歩く学生たちという写真を撮影していたことから、古熊谷の大畔の整備活動にこの名称がついた。具体的には熊谷から古熊谷に通じる農道沿いの大畔約 200m にアジサイを植える。



写真4 あぜーロード

<sup>6</sup> 2015 年度京都外国語大学博物館学芸員課程修了展は、資料館開催「よってきね！くまだん ～暮らしの風景～」とくまカフェでの「おいでやす！くまだん ～京都外大からこんにちは～」を開催した。

アジサイ植栽の理由は、アジサイが畦を弱めないことと熊谷住民からのリクエストであった。とくに区では隣接する古屋区、増谷区へ向かう道路沿い、熊谷を含めた西三区の共同施設である生活改善センター周辺を各季節に花が咲くようにするためである。春には桜、夏にはアジサイ、秋にはコスモス、冬には福井県の花である水仙が咲く。

#### 4) 水田ビオトープ

古熊谷の中心にある 7 段からなる水田で、谷奥には水源があり、最奥の耕作されていない水田をビオトープとして利用し、有機無農薬の米作りを行うことでどのような生き物が戻ってくるのかを調査する。ここでは、井上幸子さんが主導の「生き物観察会」と、熊谷区が中心となって活動されていた「ホタル観察会」がセットで開催された。これに参画する形でわれわれも関わることになった。

#### 5) 炭焼窯の製作と炭焼き

炭は、化石燃料の利用以前においては、煮炊き・暖房にかかる重要なエネルギーであった。熊谷では長く良好な炭の生産地として、活発に炭焼きが行われていた<sup>7</sup>。熊谷住民の多くが、炭焼きにかかる思い出は持つ。こうした熊谷の生業にかかる歴史や生活文化を発見し、資源として再現するために炭



写真 5 炭窯

焼窯を製作してもらった。これには越前市白山地区で炭焼窯を持つ住民や、かつて熊谷区の住民であった田中さん（地区を離れたが、近年ふたたび日帰りで活動）が炭焼きの経験があるということで窯の製作、炭焼きに協力してもらった。

熊谷区では、一般の方も参加できる炭焼き体験プログラムを企画・実施した。毎年 7 月中旬に周辺の雑木から適当は材を切り出し、約 1m の長さに切って窯場近くで保管し、その後窯入れ、火入れの作業を行い、約 1 週間～10 日間窯を閉じ、炭を焼きあげる。この作業のタイミングは、経験がないと大変難しいことが分かった。

こうした活動は、目標である 1)村づくりに向けた学術的基本調査の②熊谷および古熊谷に関する歴史的・民俗学的調査による資料収集、③熊谷を中心とした伝統的生活文化の調査であり、3)村づくりに向けた発展的実践活動にもつなげたいと考えた。

なお、こうしたフィールドミュージアム活動は、福井新聞をはじめいくつかのマスコミから取材を受けた。

<sup>7</sup> 熊谷周辺に広がる中山間地から奥中山間地にかけての雑木林が重要な炭原木の供給源だったと思われる。これはおそらく中世以降盛んにおこなわれた窯業の知識と経験があったと推測する。

## 2.3 福井県ふるさと茶屋事業によるくまカフェ改修とあらたな活動

### 2.3.1 福井県ふるさと茶屋事業

福井県ふるさと茶屋事業は「地域住民の交流や地域の農産物販売などのコミュニティビジネスを行う地域活動と、地域活動の拠点整備を「福井ふるさと茶屋」として支援しています。」とある<sup>8</sup>。具体的には表1のようになっている。

表1 「福井ふるさと茶屋」支援制度（抜粋）

<p>実施主体：地域コミュニティ組織、市町</p> <p>支援内容：</p> <p>活動経費（活動計画策定に係る費用、活動計画に基づき実施する事業に係る経費）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・補助上限額 6,000 千円（補助率：2/3、市町 1/3）</li> </ul> <p>施設整備（空き家や公共施設等の改修に係る経費）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・補助上限額 10,000 千円（空き家等）（補助率：2/3、市町 1/3）</li> <li>・補助上限額 30,000 千円（公共施設）（補助率：1/2、市町 1/2）</li> </ul>
---

西三区自治協議会では、拠点としている古民家が老朽化（雨漏り、床下根太の腐敗、畳腐朽、トイレ、台所の老朽化など）していることへの対策として、この補助金を活用することを計画された。越前町とも協議の上、施設整備（空き家や公共施設等の改修に係る経費）として、補助上限額 6,000 千円（空き家や公共施設等の改修に係る経費）の申請をされた。

また、利用するわれわれの要望も受け入れていただき、薪ストーブを設置してもらった。この目的は、古熊谷の水田周辺や熊谷区内での雑木伐採によって出た雑木を薪にすることで、二酸化炭素排出にかかる問題を提起、考えるきっかけとするためである。これは活動目標の 2)村づくりに向けた実験的実践活動の⑤休耕田・ため池などの活用、周辺の里山の再生と関連し、このあと説明する炭焼き窯の再生を位置付けた、1)村づくりに向けた学術的基本調査の②熊谷および古熊谷に関する歴史的民俗学的調査による資料収集、③熊谷を中心とした伝統的生活文化の調査にもつながっている。これらは現在の活動のテーマである環境保全型生業にかかる活動の起点となった。

2.3.2 2018年「越前ふるさとフィールドミュージアム」を支える協働ネットワーク提案 くまカフェ改修を踏まえて、5年間の活動の成果をベースに次の段階となるフィールドミュージアム構想を提案した（図4）。

<sup>8</sup> 福井県 HP「福井ふるさと茶屋」、

<https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/sityousinkou/furusato/furusatotyaya.html>

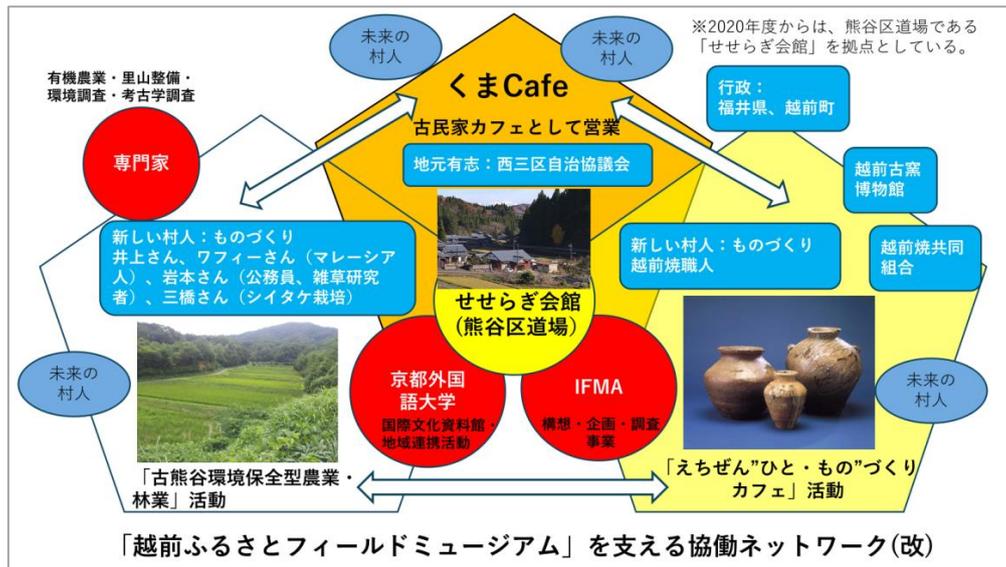


図4 越前フィールドミュージアム構想 (2018)

1) くまカフェ

あらたに西三区自治協議会が運営する「地域交流施設 古民家『くまカフェ』」として営業を開始した。これは現在も営業しており（新型コロナウイルス感染拡大期を除く）、おもに区域外、越前町内外からの一般客が訪れている。われわれの活動の拠点は、区内にある民家を「くまカフェ+（プラス）」として整備するとともに、現在は熊谷区の共有施設（道場）である「せせらぎ会館」に移している。

2) 古熊谷環境保全型農業・林業

活動の中心である古熊谷での井上さんの有機無農薬米づくり支援については、イノシンに加えてシカによる被害の増加が目立つようになった。これ以降、水田を護る金属製柵および電気柵の設置と整備にかかる時間的、経費的負担が古熊谷だけではなく、井上さんがあらたに担うことになった小曾原地区においても顕著となった。これは現在、中山間地における持続可能な農業、林業を進めるうえでもっとも重大な課題となっている。



写真6 くまカフェリニューアルオープン



写真7 せせらぎ会館前にて

一方、構想にある新しい住民については、熊谷区の雑木林の中でシイタケ栽培<sup>9</sup>を開始した三橋玖実さん、これに続いて井上さんが代表する「田んぼの天使」の社員として働くようになったマレーシア人のワフィさん（ムハマド・ワフィ・ビン・アズィズル）<sup>10</sup>が、熊谷区のあらたな拠点として整備した「くまかふえ+」に住んでいる。また、古熊谷水田の雑草研究をスタートに生き物観察会でも講師を務めてもらっている岩本愁猴さんもボランティアで参加している<sup>11</sup>。このように、このフィールドミュージアム活動をきっかけに熊谷区との交流を続けている方も増えている。いわゆる関係人口である。ここには京都外国語大学を卒業した OB が含まれている。

### 3) 「えちぜん ”ひと・もの” づくりカフェ」活動

熊谷周辺が越前焼の故郷であることは先に記したが、古熊谷周辺の雑木林の中に残る窯跡を地域の資産として活用することは当初からの目的であった。熊谷区民の西野哲司さんは、継続的に古熊谷雑木林の伐採などを自主的に実施、その中では窯跡周辺やそこに至る道の整備も進めておられた。これもまた古熊谷の景観を守ることにつながっており、あらたな活動構想のなかではこの地であらためて越前焼を製作することを目標に、越前焼の作り手やこれにかかる人々の交流、さらに越前陶芸村の施設（福井県陶芸館、越前古窯博物館<sup>12</sup>）との連携を組み入れた。

## 2.3.3 コミュニティ・エンゲージメント・プログラム越前（CEP）と越前ライスフィールドプロジェクト（ERFP：Echizen Rice Field Project）の開始

### 1) コミュニティ・エンゲージメント・プログラム越前（CEP）

2019 年国際貢献学部 2 年生の必修授業であるコミュニティ・エンゲージメント・プログラム活動が開始、南の越前フィールドミュージアム活動で受け入れることとし、2019 年 9 月～1 月に初めてグローバル観光学科学生 8 名を受け入れた。なお、CEP 越前は 2021 年度までの 3 年間実施した。

---

<sup>9</sup> シイタケ栽培が雑木林の環境を守っているという。確かに三橋さん（現在は木村姓、福井市内在住）のシイタケの榎木が並ぶ場所は、一定の間隔で雑木が整備され、山を守っているという言葉を実感できる空間である。

<sup>10</sup> 富山大学大学院で知能情報工学を専攻し、富山県朝日町の地域おこし協力隊員を経て、現在は、外国人高度人材として有機無農薬米作りにスマート農業導入を目的に田んぼの天使で働いている。将来は母国で有機無農薬の米作り導入を目指している。一方、働き手不足を解決する方法として外国人労働者の受け入れが必要とされているが、ワフィさんもそうだが外国人が日本で安定的に働き続けるについてはさまざまな課題がある。近々、新しい制度になる外国人技能実習生制度にかかる問題もその一つである。

<sup>11</sup> 岩本さんが生き物観察会でくりかえし説明される「農業が中山間地の豊かな景観、自然環境を守ってきた」は、現在の環境保全型生業活動の基礎になっている。

<sup>12</sup> 熊谷区内あった水野九右衛門邸は陶芸村に移築復元され越前古窯博物館として 2018 年開館した。

このプログラムでは、観光と持続可能な開発目標をテーマとして、コミュニティにエンゲージした活動を行う。CEP 越前では、春学期の授業「コミュニティ・エンゲージメント・ワークショップ II」の中で、越前フィールドミュージアム活動について学習をする。2019 年は、事前活動として古熊谷での田植え作業に参加した。さらに、夏期休暇の 9 月には越前フィールドミュージアム活動の夏合宿に参加した。正規授業となる 9 月末からの秋学期は、10 月（熊谷区八幡神社、西三区秋祭り）、11 月、12 月（各人による聞き取り調査などフィールドワーク）、1 月（左義長参加、活動報告会）の各月、3～5 日間の現地活動をくまカフェを拠点に行った。

## 2) 越前ライスフィールドプロジェクト（ERFP：Echizen Rice Field Project）

田んぼの天使の井上さんは、古熊谷の持続可能な米作りの課題解決に向けて、獣害対策などを目的とした普及啓発活動を行われていた。1 つは、古熊谷内の一部に位置する杉林<sup>13</sup>の中でのマウントオブミュージックである。夜間、野外で大音量の音楽を楽しむ活動を通してイノシシやシカに警戒感を持たそうというイベントである。井上さんによれば、確かにこのイベント後、1 週間程度はイノシシ、シカの出現は減るように感じるとのことであった。

もう 1 つは、古熊谷堂の上の水田での田植えイベントである。これは井上さんも所属する越前町若者移住促進プロジェクトチーム「ココクルー」の活動の 1 つとして実施された。主旨としては、豊かな自然環境に囲まれた水田での田植え体験を通して、有機無農薬の米作りについて理解を広げることである。活動を盛り上げるために現地で DJ に音楽を流してもらうなどの工夫をされていた。2018 年からこの活動に越前フィールドミュージアム活動の学生たちも参加した。上記のように 2019CEP では、事前活動として全員が参加している。



写真 8 田植えイベント



写真 9 稲刈りイベント

<sup>13</sup> 古熊谷では杉の植林が少ない場所である。これは故水野九右衛門氏が熊谷などの住民に杉の植林を避けるように指導されていたことによるという話を住民の多くから聞く。確かにそのせいもあってか、この杉林をのぞいて周辺は四季豊かな雑木林に囲まれている。環境保全型農業、林業にふさわしい自然景観を保っている。



限られた条件下とはいえ活動が可能となったのは、それまでに熊谷住民とフィールドミュージアム活動のメンバーの間に信頼関係が形成されていたからである<sup>14</sup>。活動は、熊谷区内に限ること、住民との接触は一部に限ること、という条件があった。本来は各人がテーマを決めるがグループとして一つのテーマに限った調査を行った。

具体的なテーマは、熊谷の食文化となった。これは地元メンバーの岩本さんが信州大大学院博士課程後期在籍中に、長野県伊那市内で地元の食材と地元のレストランを結びつけるマルシェ活動<sup>15</sup>を行っておられたことがヒントになった。具体的には、熊谷各世帯に食材と調理方法についてアンケートをとり、将来の熊谷オリジナルメニューの開発などに結び付けようとするものである。これは、越前フィールドミュージアム活動目標の 1)村づくりに向けた学術的基本調査の③熊谷を中心とした伝統的生活文化の調査でもあり、3)村づくりに向けた発展的実践活動の⑧新しい村による衣食住文化・年中行事の開始、新ブランドづくり、につながるものである。

また、住民からヒントを得て、オリジナルの環境に影響を与える、外来植物のセイタカアワダチソウを利用したメニューの開発や染織実験、越前の陶土を使った焼き物実験など大学内の施設を利用して実施できた。いずれも 3)村づくりに向けた発展的実践活動に結びつくものである。

### 3.2 2021CEP 活動と ERF P

2021 年度は、感染対策の実施、受け入れ先の了解と感染対策を整えることで、ほぼ 2019 年に近い活動を実施できた。とくに 9 月には古熊谷堂の上での稲刈りに参加している。しかし古熊谷での獣害が酷く、8 畝の収穫が 70 キロ少々という状況であった<sup>16</sup>。これが ERF P のスタートでもあり、今後どう収穫を増やすかという課題は、今までの井上さんのところの課題だけでなく、越前フィールドミュージアム活動のあらたな目標にもなった。

また、CEP では古熊谷の自然環境の保全、空き家の活用、ブルーツーリズムなどについてとりあげた。熊谷区が直面している少子高齢化、人口減少は、越前の中山間地だけでなく日本の中山間地に共通した問題である。さらにブルーツーリズムをとりあげた調査では、越前海岸で資源の保全とバランスのとれたベニズワイ漁を行う山下富士夫さんに聞き取り調

---

<sup>14</sup> とはいえ他府県ナンバーの車にも敏感に反応していた時期であり、ましてや京都外国語大学のロゴのあるバスでの移動は、周辺の集落（事情を知らない）から西三区自治協議会会長などに連絡が入ったこともあった。そのたびに説明いただいたという経過がある。これはあらためてこうしたコミュニティ・エンゲージメント活動においては、コミュニティとの信頼関係の形成が重要であることを表している。

<sup>15</sup> 岩本さんによれば、地元の食材は大都市圏に流れ、地元のレストラン、シェフは新鮮で良い食材をわざわざ他県から仕入れているという課題を解決するひとつの方法とする。両者を結び付け、地元ならではのメニューの開発にもつなげようとする、いわゆる地産地消の活動でもあるとのことである。

<sup>16</sup> 中山間地の水田の場合でも、1 反あたり 5～6 俵(300～360 kg)の収穫が最低条件といわれており、いかに状況が悪かったかを示している。

査を行うなど、熊谷のある中山間地から丹生山地そして海岸を含めた広域での環境保全型生業を通じたまちづくりにつながる調査も実施した。

#### 4. 複文化・複言語活動による実践的地域研究の受入れ

本節からは、今回の研究課題「複言語・複文化活動を通じた学びの共同体の構築と有効性：～外国語大学における学びの可能性を考える～」による調査報告の本文となる。

##### 4.1 越前フィールドミュージアム活動による高大連携活動へのきっかけ

2019 年の本学中国語学科の島村典子准教授の「フィールドワークを通じた高大連携型外国語教育の実践活動」を受け入れるきっかけは、2018 年に南が同志社大学院での授業で中国からの留学生に越前でのフィールドワークを実施したからである。留学生が滞在中に、日本の中山間地の自然や農村の景観、農業に示した関心や興味、また熊谷住民との交流の様子、また、指導する私やフィールド活動に参加している京都外大の学生が、留学生が当番で作る中国料理を一緒に食べていると<sup>17</sup>、お互いに異文化を体験的に学んでいるという実感をもった。そこで熊谷に留学生が滞在するタイミングで、井上さんから足羽高校中国語研究会（クラブ）を指導されている青山京子先生（当時）を紹介いただいた。そこで熊谷での中国からの留学生滞在をお知らせしたところ、研究会の高校生 3 名をつれてくまカフェに来られた。この活動に参加した高校生と話をした時、生きた中国語を学ぶことで中国語を学ぶ意欲が出たという意見もあった。

こうした成果を科研費チームで報告したところ、島村准教授と青山先生との間で今回の高大連携活動の実施につながった。

##### 4.2 科研費による「フィールドワークを通じた高大連携型外国語教育の実践」活動の受入れ

活動の内容と活動を受け入れた地域側からみた成果と課題は、島村先生の報告と活動をとりあげた研究論文<sup>18</sup>（島村・青山・南 2024）にゆずる。

---

<sup>17</sup> くまカフェ、現在のせせらぎ会館滞在中は、参加者が当番で食事のメニューを考えて買い出しに行く。料理するときはメンバーが手伝うこともある。外国人留学生も同様の役割を持つので、少し大げさになるが多国籍の食を楽しむことにもなる。

<sup>18</sup> 島村典子・南博史・青山恭子（2024）「フィールドワークを通じた高大連携型外国語教育の実践」、『国際言語文化』、京都外国語大学国際言語平和研究所、第 8 号、pp.95-104.

## 5. 複言語・複文化活動のための越前町フィールドミュージアムの可能性

本章では、あらためてフィールドミュージアム活動が、複言語・複文化活動としても機能し、結果として複言語・複文化主義を身に着けた個人が、フィールドミュージアムの目的である「人々が心豊かに暮らしやすい地域」に貢献しうるのか、その可能性をまとめる。

### 5.1 新型コロナウイルス感染拡大期（with コロナから after コロナ）以降のフィールドミュージアム活動

新型コロナウイルス感染拡大期においても、CEP を中心に一定のフィールドワークを実施してきたことは前記した。

整理すると①学生を主体とする古熊谷堂の上水田での有機無農薬米づくり活動（ERFP）、②CEP 学生を中心とした課題解決型プロジェクト調査、③これらを通じたあらたなネットワークの形成、である。一方、この間には熊谷区の高齢化が進んでいることによる住民自治の危機、そしてフィールドワークへの協働が難しくなってきたことがあり、古熊谷における持続可能な有機無農薬米作りに黄色信号がともる。具体的には獣害問題、中山間地の農業がおかれている社会的経済的問題、その背景にある国の政策である。その例として、食の安全と食料自給率をとりあげる。

### 5.2 食の安全と食料自給率の問題

日本の食料自給率の現状については多くが知るところではある。具体的に農水省から発表されているデータ（図 6、図 7）から読み取れる。

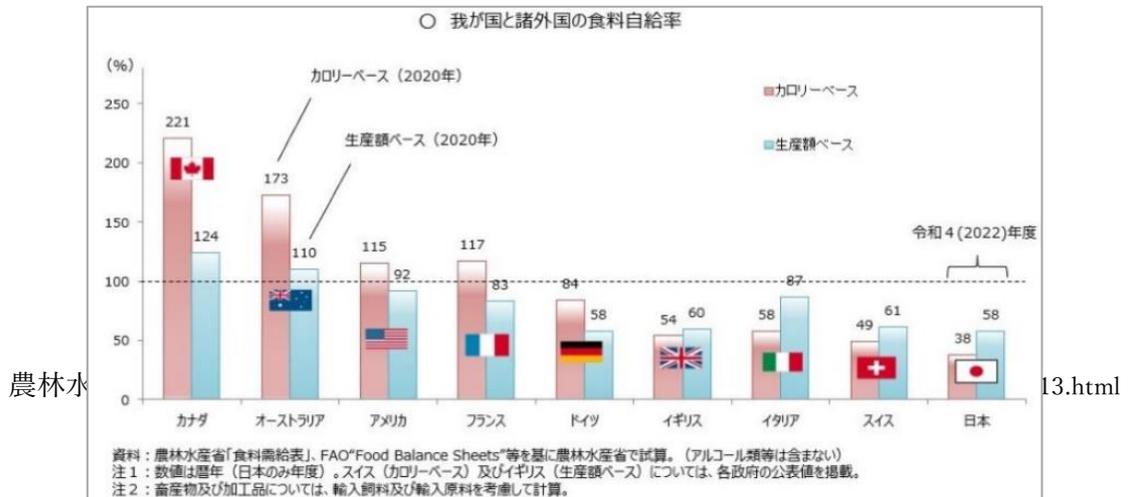


図 6 食料自給率の変遷図

農林水産省 HP「日本の食料自給率」より [https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu\\_ritu/012.html](https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/012.html)

とくに近年は、新型コロナウイルス感染拡大や、ロシアのウクライナ侵攻も日本の農業に様々な影響を与えている。さらには中近東の情勢悪化は、燃料費の高騰を招き、肥料不足が顕著となっている。国はこうしたリスクを表2のようにまとめている。

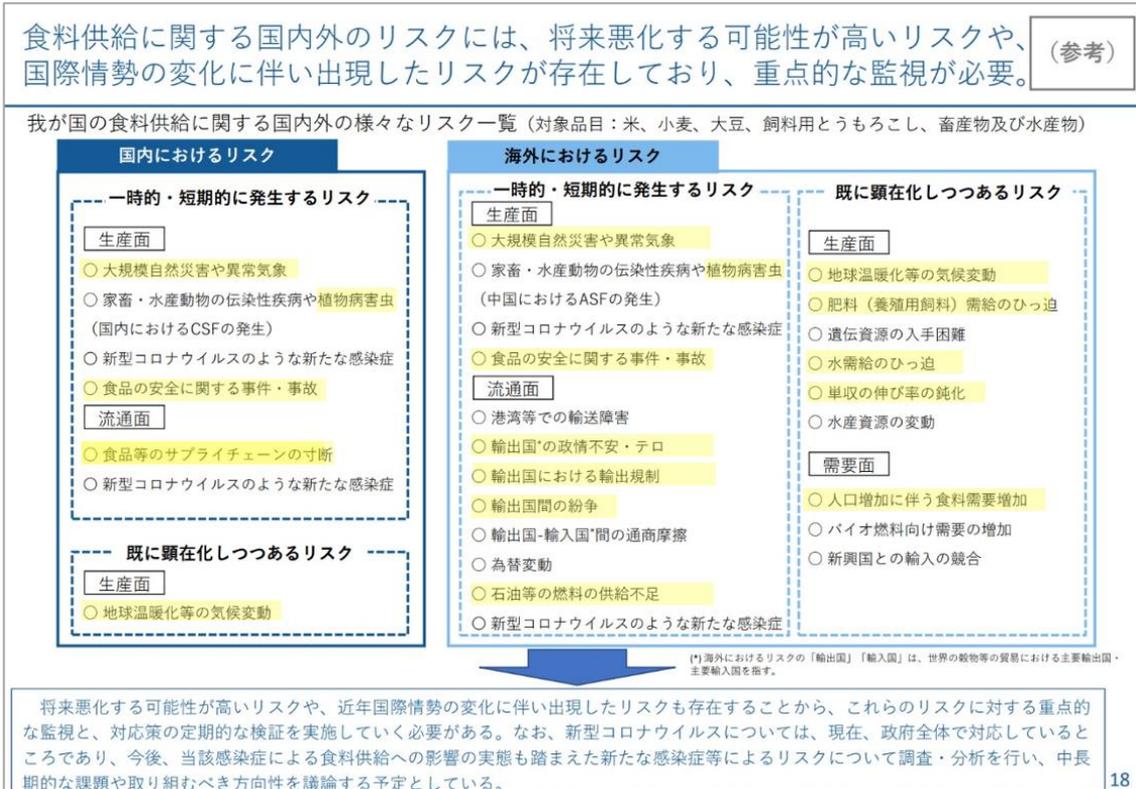


表2 食料供給に関する国内外のさまざまなリスク一覧表

農林水産省 (2022) 『食料の安定供給に係るリスク分析・評価』 p.18 より

※黄色部分はとくに農業にかかるリスク (南加筆)

これに加えての中山間地の獣害も大きな問題である。

このようにまさに「一粒のお米からみえる」ことは、グローバルな課題につながっていることがわかる。さらに近年は、中山間地の農業・農村には、日本の伝統的農村風景維持、防災的機能、水源保全・管理<sup>19)</sup>の役割が指摘されている。

### 5.3 熊谷区の現状と課題解決に向けた取り組み

あらためて熊谷区の現状と課題をまとめると、高齢化が進んでいることによる住民自治の危機、それにとまなうフィールドワークへの協働が困難になってきたことがある。

これに加えて古熊谷での有機無農薬の米作りを続けてきた井上さんの田んぼの天使も人的経営的に厳しい環境下にある。個人営業から会社運営に切り替え、小曾原を中心に担い手

<sup>19)</sup> 近年、外国資本による日本の水源地を含む土地、山林の取得が、将来大きな問題になってくると言われる。

となってあらたな水田の稲作を受け持ったが、獣害の悪化、地主および地域コミュニティとの協働にかかる問題、米の売価など国の農業政策がその背景にある。ここに上記のようなリスクをもたらす影響が加わっている。

こうした問題を基盤におきながら、これまでの活動で築いてきたネットワーク、フィールドワークの経験、そして調査成果を活かして、これからの越前フィールドミュージアム活動の文化・社会・経済的目標にむけた活動を開始した。

### 5.3.1 くまだん大学

2022 年 4 月、2021 年度にイオン環境財団から補助<sup>20</sup>を受けた成果を受けて、ERFP を中心に環境保全型農林業をテーマにした体験型連続講座「福井県越前町フィールドミュージアム講座『くまだん大学』」を開講した。熊谷区、田んぼの天使、NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所が主催し、京都外国語大学グローバル観光学科の学生がたちあげた任意団体「にじいろファーム」<sup>21</sup>が企画・運営を担うことにした。

獣害、高齢化、農地の荒廃などの熊谷区の課題は、日本全国の中山間地の農山村にも当てはまる。くまだん大学を通して、これら課題解決のためにできることを学び、ともに考えていく中で、熊谷に継続的に関わりこの地域を守りたいと思う仲間（ここで言う、新しい村人＝関係人口）を増やすことを目的とするだけでなく、くまだん大学を通して得た知識、経験を他の地域でも活かしてもらいたいと考えた。

また、これまでの越前フィールドミュージアム活動の中心であった京都外国語大学の学生だけでは、活動をカバーできなくなっていることもある。近年、熊谷区の高齢化が進み、住民は増加した獣害対策など古熊谷での米作りにかかる協働のみならず、地区の清掃や草刈などの奉仕活動や自治にかかる活動などへの負担、参加すら厳しくなっている。

もちろん、フィールドミュージアム活動の範囲が広く、多様になってきたこともある。現在のテーマである環境保全型生業にかかる範囲は越前海岸まで広がっている。加えて古熊谷堂の上の水田で無農薬の米作りでは、除草がいかに重要であるかがその収穫量の変化<sup>22</sup>を見ればあきらかである。広く人材を求めていく段階にきている。

---

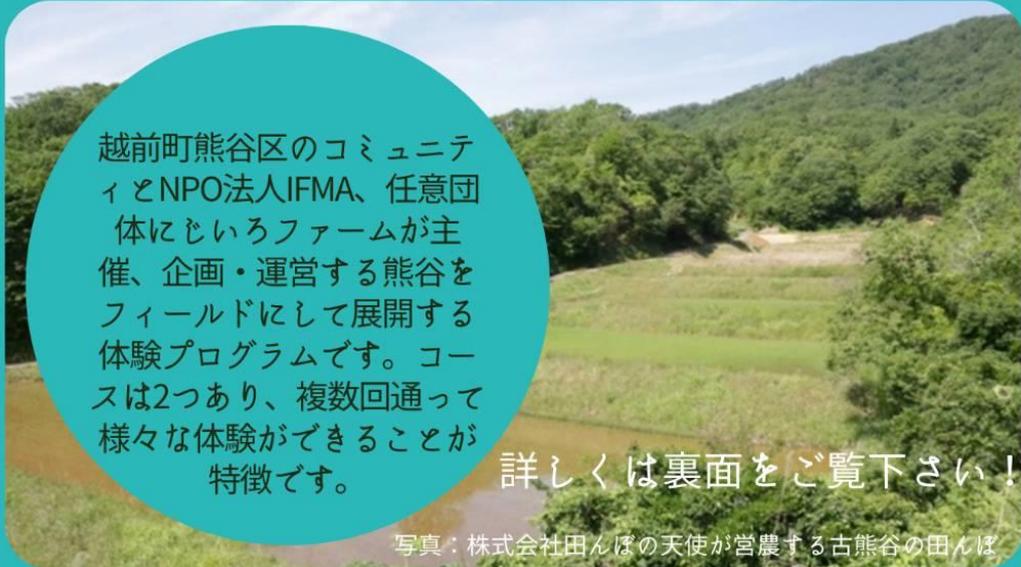
<sup>20</sup> NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所が申請した。内容は獣害対策に対する費用とくまだん大学と称することになる一般対象の連続講座を企画、実施した。

<sup>21</sup> 藤松桃葉さん（グローバル観光学科 2022 年度卒）。農業を通じた豊かなまちづくりをテーマに 2023 年 4～12 月は京都市左京区の大原に拠点を置いて実践的研究活動を行った。2024 年 1 月からは実家のある大分市に拠点を移して活動を続けている。引き続き、NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所の賛助会員として越前フィールドミュージアム活動をサポートしている。

<sup>22</sup> 2021 年 70 kg、2022 年 110 kg、そして 2023 年は藤松さんが 6 月の除草、そして水管理を行ったおかげでほぼ 200 kg の収穫があった。

第2期開講(福井県越前町フィールドミュージアム講座)

# 2023 くまだん大学



越前町熊谷区のコミュニティとNPO法人IFMA、任意団体にいろいろファームが主催、企画・運営する熊谷をフィールドにして展開する体験プログラムです。コースは2つあり、複数回通って様々な体験ができることが特徴です。

詳しくは裏面をご覧ください！

写真：株式会社田んぼの天使が営農する古熊谷の田んぼ

新型コロナウイルス感染症の感染拡大がきっかけとなり、地方へ移住する人が増えていると言われていますが、過疎化による地方コミュニティの維持はますます難しくなっています。また、世界的には地球温暖化、日本では食糧自給率の低下といった課題があります。

くまだん大学は、過疎化が進む中山間地域の熊谷区を含む「里山海」をフィールドに、こうした課題の解決のためにできることを実践的に学ぶプログラムです！環境保全型農業、林業、漁業など「里山海」の中での活動や、コミュニティの方々と一緒に取り組む元気で豊かなまちづくり活動を通して、日本の原風景といえる中山間地域を取り囲む「里山海」の課題や環境・食料問題について学び、考えてみませんか？

## 環境保全型米作り体験コース

奥里山で無農薬の米作りをすすめる田んぼの天使と協働して、田んぼの一面でお米を育てます。さらに、林業・漁業コースと連携し、無農薬の米づくりをすることが奥里山の自然環境を守っていることを学びます。完成したお米は「田んぼの姫」として販売、活動を広く発信します。また、無農薬の米づくりには除草作業が重要です。今年度は除草作業を楽しく行います。清らかな山水が流れホタルが見られる自然豊かな奥里山で環境保全型農業を学びましょう！



## 環境保全型「里山海」体験コース

越前の「里山海」を守る活動として、昨年に引き続き炭焼と新たに資源保存と持続可能な漁業を学ぶ体験講座を開きます。熊谷では数年前から炭窯を復元し炭を焼いてきましたが、地域住民の高齢化により雑木の伐採、炭焼の実施が困難となりました。炭窯は1年でも不使用だと使えなくなってしまう。そこで第3期の炭焼復活を目標に、今年は炭窯の活用を考えてみたいと思います。陶芸ができないか、燻製は？いろいろ参加者で実験していきます。

図8 くまだん大学チラシ (2023年)

なお、2022 年度、2023 年度のくまだん大学のプログラムは以下である。

1) 2022 年度くまだん大学 環境保全型林業・農業体験講座

5 月：開講式・しいたけの駒打ち体験

挨拶・講師：西三区自治協議会会長西野良一、木村（三橋）玖実

6 月上旬：田植え（手植え）体験 講師：田んぼの天使代表井上高宏、会長井上幸子

6 月下旬：生き物観察会 講師：岩本愁猴、田んぼの天使会長井上幸子

9 月：稲刈り（手刈り）、稲架掛け体験 講師：西三区自治協議会会長西野良一

10 月：地域ブランド「田んぼの姫」として、専用デザイン袋を利用し袋詰め作業、一部販売<sup>23</sup>。

11 月：報告会・閉講式 挨拶：西三区

自治協議会会長西野良一、NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所南博史。報告会では、熊谷区住民、一般参加者、学芸員課程履修生など京都外大生、講師の方々が3つのグループに分かれて2022年くまだん大学の振り返りワークショップを行った。



写真 10 古熊谷での獣害柵の設置作業

2) 2023 年度くまだん大学 環境保全型生業体験活動

5 月：開講式・しいたけの駒打ち体験

挨拶・講師：西三区自治協議会会長西野良一、木村（三橋）玖実

6 月上旬：田植え（一部、手植え）体験 講師：田んぼの天使代表井上高宏、岩本愁猴

6 月下旬：生き物観察会<sup>24</sup> 講師：岩本愁猴、田んぼの天使会長井上幸子

7 月 30 日：漁業体験<sup>25</sup> 講師：山下富士夫

<sup>23</sup> 「田んぼの姫」のデザインは、学芸員課程履修生で南公共政策ゼミの英米語学科北島嵩晟さんが担当。田んぼの姫は登録商標になっている。なお、11月に開催された学園祭にて、田んぼの姫を使った焼きおにぎりや、袋詰めした田んぼの姫を販売した。

<sup>24</sup> 2023年の生き物観察会は、コロナ以前と同様、岩本さん企画の生き物調査をテーマとした古熊谷での活動を終えた後、せせらぎ会館で活動振り返りワークショップを開催。その後、熊谷区女性陣によるカレーのふるまい、そして久しぶりにホテル観賞会を実施するなど熊谷区住民とも協働する活動になった。

<sup>25</sup> 今期はじめて漁業体験プログラムを組み込んだ。山下さんの企画と段取りによって、未明に集合、定置網の引揚場を別の船から観察、その後、港に戻り水揚げ、市場でのセリを見学した。その後、漁業組合の一室で山下さんからベニズワイガニの資源保全と水揚げ量のバランスのとれた環境保全型ともいべき漁業について説明を受けた。

- 8 月：炭焼窯の活用にむけた活動<sup>26</sup> 参加者：にじいろファーム藤松桃葉、福井県庁職員、学芸員課程履修生籠谷実穂、南博史
- 9 月：稲刈り（手刈り）、稲架掛け体験 講師：西三区自治協議会会長西野良一
- 10 月：袋詰め、試食会：参加者：にじいろファーム藤松桃葉、村田製作所社員親子、学芸員課程履修生籠谷実穂、南博史
- 11 月：報告会・閉講式 挨拶：西三区自治協議会会長西野良一、NPO 法人フィールドミュージアム文化研究所南博史
- 報告会では、活動の参加者（集落支援員含め）、講師で意見交換を行った。  
なお、くまだん大学については、丹南ケーブルが積極的に取材、発信していただいた。

### 5.3.2 あらたなネットワーク にもとづく活動

#### 1) にじいろファームによる 連携活動

こうしたくまだん大学を中心とした活動にあわせて、にじいろファームの藤松さんが積極的に外部と繋がる活動を行った。方法の 1 つは SNS の活用がある。こうしてつながったネットワークとしては、



写真 11 学園祭での田んぼの姫の販売

越前町でまちづくりなどに取り組む有志のグループ、越前町まちづくり makeit<sup>27</sup>がある。また、県外で同様の活動を行っている団体との情報交換も重要なネットワークである。さらに、ココクルーのマルシェ活動には田んぼの姫の出品させてもらった。

#### 2) 越前町定住促進課との連携

---

<sup>26</sup> 炭焼窯での炭づくりにも住民の高齢化の影響があって、2023 年は炭焼きが実施できないことになった。窯はしばらく放置しておく天井から崩れるらしく、一定の保守活動を行う必要があった。どうすれば窯を残せるかを参加者で考えようというプログラムであった。今回は窯の中で、燻製が作れないかというアイデアを実施した。結論からすると窯の保全するような燻製をするためには大掛かりな道具と知識、経験が必要であるとなった。したがって、このまま放置せざるを得なくなるのではないかと危惧している。あらためて窯の活用を考えたい。

<sup>27</sup> 福井県丹生郡越前町(旧朝日町)で育った 6 人による団体。2022 年に設立された、ホームページ <https://makeit1023.mystrikingly.com/> や Instagram <https://www.threads.net/@makeit1023> などから、積極的に幅広い活動の発信を行っている。

越前町移住促進課では、将来の移住者にむけた滞在型の体験施設<sup>28</sup>を小曾原と茂原(越前海岸)に持っていた。利用者は町外であることなど一定の条件にあえば、低料金で施設を数日間使うことができるという仕組みであった。越前フィールドワークでも活用できないかと相談していたが、新型コロナウイルス感染拡大期は閉鎖されていたため利用はできなかった。

2023 年 4 月、あらためて両施設を再開することになり、新たな利用ルールに従って、くまだん大学の講座を組みこんでもらうことになった。あらたな施設利用のルールでは、宿泊利用料は無料とするが、町があらかじめ認めているプログラムに参加が条件となったため、そのプログラムを準備する必要があった。残念ながら 2023 年度は参加が無かった。われわれからの発信力の不足と考えている。

2024 年度も引き続きプログラムの 1 つになるので、今期の反省を生かして、町外からくまだん大学、そして越前フィールドワークへの参加者を募集したい。

### 3) 越前町村田製作所福利厚生活動との連携

田んぼの天使の井上幸子さん、井上高宏さんと越前町村田製作所との交流を背景に、2023 年度越前町村田製作所社員の方の福利厚生、余暇活動として、くまだん大学の講座への参加を呼び掛けていただくことになった。ただ、同様に参加は、10 月の袋詰めと試食に参加いただいたご担当職員さん親子のみであった。これもプログラムの準備が遅れ気味になることが大きな原因と考えている。

### 4) あらたなネットワーク活用に向けた課題

こうした新しい活動ネットワークによる活動の共通の課題は、プログラムの中身とタイムリーな発信であると考ええる。3 年目になるくまだん大学の講座は、過去 2 回の活動の内容と反応を考慮し、単発で参加できるような内容(たとえば、田植えや稲刈り、漁業の単発だけではなく、それぞれ季節に応じた地元の食のイベントを重ねるなどの工夫が必要)を考えたい。

一方、長くご縁の続いている京都外国語大学校友会福井支部との新たな連携も重要と考えている。コロナ以前は校友会の国際交流イベントを中心にお手伝いしてきた。コロナ後を迎えて支部の方でも活動を再開されており、協働できる機会を探していきたい。

## 5.3 複言語・複文化活動のための越前町フィールドミュージアムの可能性

最後に、10 年を越える越前町フィールドミュージアム活動を通して、今回の研究のテーマである複言語・複文化活動としてのフィールドワークが可能かについてまとめる。

活動の成果のなかでその分析にもっともふさわしいデータは、活動に参加した学生、熊谷区住民、あらたな住民=関係人口としての外部人材、活動を直接的、間接的に支援する外部組織からの評価、反応だろう。ただ、現在のところこうしたデータをまとめきれていない。

---

<sup>28</sup> 越前町定住促進課「越前町移住・二地域居住体験施設【モハージュ・ラフーラ】」

<https://www.town.echizen.fukui.jp/kurashi/04/07/p004063.html>、参照。

この収集分析は今後に残すとして、地域と外部をつなぐ役割を果たしてきた南の主観的ではあるが分析をまとめて終わりとする。

### 5.3.1 参加学生について

活動に参加した学生については、日常の行動や言動の中での変化をとらえてみたい。まず卒業論文に熊谷をとりあげた学生は 3 名、1 名は卒業後、地域おこし協力隊員として大阪では働いている。また、1 名は奥出雲の中山間地で拠点を置いて暮らしている。そして、1 名は大学院へ進学し、農村社会学研究を専攻した。一度、地域おこし協力隊員を経て、博士課程後期で博士論文をまとめている。このように卒業後のキャリア（ライフキャリア）に影響があったことがわかる。

稲刈りに参加した学生や外部人材に、にじいろファームの藤松さんが聞き取り調査を行っている。分析結果はまだ発表されていないが、調査にたちあっていたところでは、彼らが異口同音に、中山間地の農山村景観の魅力、古熊谷の豊かな自然環境、有機無農薬の米作りへの体験と関心、熊谷の自治活動への参加を通じた住民との交流、これらに関わる熊谷での出自のことなるメンバーとの合宿体験（一緒に同じ釜の飯を食う）をあげている。

### 5.3.2 地域住民について

活動に参加していた学生の卒業論文の中に、私たちは地域の方々にとって鏡であるという表現があった。これは自分たち学生を通して、地域の方々自分たちの姿を見ているという意味である。その学生が最初にコンタクトをとった熊谷で花を育てていたおばあさんは、それ以来、学生たちが熊谷に来ることを楽しみにしておられた。そして、病床からも外で学生たちのにぎやかな声を聴いて、「また来てるんやね〜」と喜んでおられたと、お亡くなりになってからご家族の方から聞いた。

1 つのエピソードに過ぎないとも言えるが、10 年間活動をともにしてきた筆者は、学生がもたらした地域への活動の影響は大きいと感じている。そんな学生たちの活動を長く顕彰するために、生活改善センターの空き地に各人のメッセージを刻んだ陶板をはめた石柱を立てていただいた。また、周りにはそのときに植樹した桜がしだいに大きくなってきたのを見ると、われわれの活動が地域にも大きな影響があったことは確かである。

### 5.3.3 外部団体について

越前フィールドミュージアム活動が熊谷区と連携した「熊谷美土里保全会（くまだにみどり）」は、「令和 4 年度北陸農政局多面的機能発揮促進事業優良活動表彰『多面的機能支払部門』」を受けた。表彰のポイントは「NPO 法人や大学と連携した地域コミュニティの形成」とあり、10 年におよぶさまざまな団体と協働した活動を通して、「教育機関と連携した多様な世代間の交流により、地域コミュニティの活性化が図られている」とある。多様な世代間の交流は、他文化の交流といういい方もできる。また、大学からは日本人だけでなく、

留学生（中国、韓国、英国、イラン、そしてクロアチアの学生が活動した）も含まれることから複言語活動を通じた成果が評価されと理解したい。

こうした学生には当然、地域が受けた影響と同様の影響を受けているはずであり、彼らが自らのものにした他文化がどういう成長をもたらしているのかをこれから評価したい。

#### 5.4 地域をつなぐ人が必要になる

このような活動の成果を踏まえると、あきらかにフィールドミュージアム活動を通して、各人に複言語・複文化主義が認知されていると判断できる。一方で、複言語・複文化主義を各人に落とし込むためには、人と人、内部と外部、地域と地域、世代間、言語や文化が異なる者同士をむすびつける人材が必要ではないだろうか。近年、たとえばまちをデザインする役割を持った人たちについて、キュレーター、エディター（編集者）、デザイナーなどの表現が使われている。こうした人材をどう表現するのは確定していないが、まだまだ主観的な意見を客観的な主張に結び付けて行く調査を継続していく中で提案してみたい。

さいごに

以上、報告とする。

フィールドミュージアム活動に終わりはない。目標に向かって継続していくことがその価値である。手段が目的化することは決して良くないが、目的に向かう手段もまたつねに変化していく必要があり、そのプロセスが重要であることが、今回の研究の成果で明らかになったと考えている。

付表として、最初に設けたフィールドミュージアムの活動目標が、どのように達成してきたかがわかる活動目標一覧表を表3として掲示しておく。これを見ると明らかにこの科研研究期間での活動が活発化し、さらにあらたな目標も追加できていることがわかる。つまり、目標に向かって手段が変化するプロセスが重要であり、目標もまた変化し追加されていく。フィールドミュージアム活動が持続的に行われていることが「心豊かに暮らしやすいまちづくり」につながっているという意味をあらためて理解できるだろう<sup>29</sup>。

越前フィールドミュージアム活動は、10年を越える活動でもあって、その過程も成果も十分に書ききれていないが、今後も引き続き研究をブラッシュアップしていくことを明記し、これで終わりとする。

活動に参加、協働いただいた学生はじめ、地域住民や多くの方々、機関・団体のみなさまに心より感謝申し上げます。

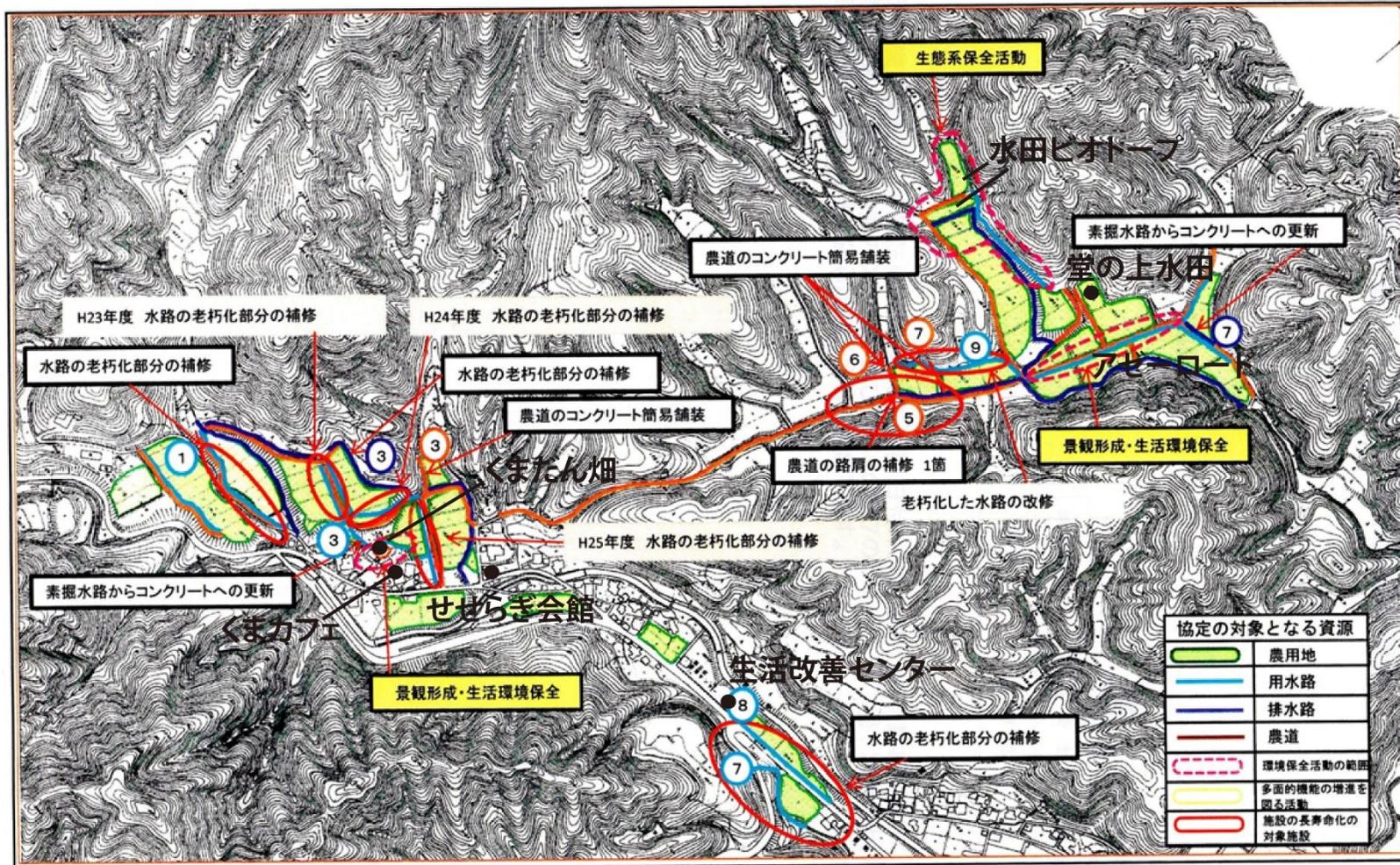
---

<sup>29</sup> コロナ以降において、最初に掲げた目標に関係する活動が増えていることがわかる（黄色部分）。

表3 越前フィールドミュージアム活動経過一覧（2024年3月時点）

リサーチテーマ	リサーチ目標	リサーチ方法・活動	熊谷住民課題 学術的課題	活動略号	活動年			
					2011年	2012年	2013年	2014年
0. 事前活動	熊谷、越前町、福井県できごと				越前焼復興プロジェクト			
	京都外国語大学・国際文化資料館の動き					学芸員課程外部連携活動開始（敦谷寺）	学芸員課程外部連携活動開始（熊谷） くまカフェ整備	
	NPO IFMAによる活動					「越前焼ひとつぼミュージアム」の提案など	越前FM構想の提示	
I. 村づくりに 向けた学術的 基本調査	①越前焼窯跡および田集落の考古学調査による資料収集			I-①				
		現地踏査による遺跡の確認	集落の位置が確認できるか					
		発掘調査の実施	考古資料の活用 の検討					
	②熊谷および古熊谷に関する歴史的民俗学的調査による資料収集			I-②				
		文献調査および聞き取り調査	熊谷のみなさんの協力を得られるか					
		熊谷の方々への説明会などの実施	活動に対する理解を広めることができるか					
II. 村づくりに 向けた実験的 実践活動	③熊谷を中心とした伝統的生活文化の調査			I-③				
		熊谷の年中行事、衣食住の関する文化を調査	熊谷のみなさんの協力を得られるか					
	④棚田の整備と有機農法の実施			II-④				
II. 村づくりに 向けた実験的 実践活動		井上高宏さんによる有機農法の実施	作業支援がどこまで必要か					
		美しい棚田周辺環境の整備	景観プランづくりと作業の具体的な実施方法					
	⑤周辺の里山の再生			II-⑤				
III. 村づくりに 向けた発展的 実践活動		周辺自然環境の調査	動植物の調査も必要になる					
		小河川、堰堤、ため池の整備	どのような里山を再生するかプランの作成					
	⑥伝統的建造物の移築			III-⑥				
		新しい村の活動拠点の整備	できれば伝統的な建造物を再現、移築したい					
			水野邸の存在意義を未来に生かす					
		新しい村の住民を迎える	サポーターの受け入れ体制					
III. 村づくりに 向けた発展的 実践活動			ルール（村式目）が必要					
	⑦古熊谷越前焼の製作			III-⑦				
		新しい村をささえるものづくり	越前焼復興の流れに乗せたいが					
III. 村づくりに 向けた発展的 実践活動	⑧新しい村による衣食住文化・年中行事の開始、新ブランドづくり			III-⑧				
			②、③を生かし行く必要					
IV. 越前町における実践的活動								
V. コロナ後のあらたな取り組み活動	⑨環境保全型生業活動							





参考図 多面的機能図(活動拠点)